

# わたしの人生分岐点 その1 早稲田実業から予科練へ

koberyo1

いま思えば、わたしの人生の大半は早稲田実業に入ったことから始まる。

分岐点となったのは、早実から海軍の予科に志願したときであった。神様や仏様といった人知を超える存在が、「お前はこの道を歩め」と示しているようにも感じられた。その当時、少年だったわたしの心に強く感じたことは、日本の将来は自分たち若い世代の双肩にかかっている、ということだった。社会の風潮も「国を守る」。そのように動いていたかと思う。

このように書くと、非常にクリアな透徹した眼で社会を見通し、キチンと思考した上で、そう思っていたわけではない。将来、自分がどう生きるか、どの道であるくかを模索したことは事実である。その土台になったのは、子どもの頃、わたしが通っていた塾の先生、T先生からもたらされた教えであった。

先生は、当時のアメリカやロシアの動静に近い未来、日本に大きな影響を与えるということを常に考えていた。塾生の子どもたちに教えたことは、「アメリカは移民の国であり、石油をたくさん持っている若い国だ」と言った。ロシアは、「広くて大きな国だが、半分以上は利用できない「氷」に閉ざされた国だ」とも。また「寒い国だが、指導者が偉大だ」とも言った。

T先生が言った、当時の国際情勢の分析が、今でも頭の底に残っている。

早稲田実業に入学して得たことは、早稲田の杜（もり）の精神で、早稲田大学の気風もあり、どこか凜とした空気を吸いながら育ったことだと思う。これが今につづくわたしの基盤を形づくった、と思う。

早稲田から高田馬場にかけては古本屋が多くて、本に興味をもち、本を読むということを知った。本を読むことが力になる、ということを知ってくれたのだ。

学友のK君から、中西悟堂の書いた「野良と共に」を夢中になって読んだ。今思えば、「自然と人生」という大切なテーマを知らしめてくれたと思う。

やがて、そうこうしているうちに時代は軍国主義一色に傾いていった。

少年であるわたしは予科練に入りたいと思った。というのも海軍には巨大な艦船がある。そうした艦船や、船を操る人やテクノロジー、さらにこれらを組織としてまとめ上げてゆくマネジメントの偉大なパワーに対し、途方もない憧れを抱いたからである。人は訓練さえすれば、戦闘機を駆って空中へと舞い上がり、空ばかりではなく、海にも組織のマネジメント力によって卑小な自己がいきいきと「生きる」ことだと思ったのだ

った。

すなわち、軍人になるということは、官僚になり、国家を運営する組織人になることだと思ったのである。もし (if) の力でアメリカやロシアに対し、日本が国政的な発言ができるようになれば、自分もまた、将来、官僚になるのだから世界を飛びまわる活躍ができるのではないか、と夢のまた夢を追いつづけたのだった。

今、思えば恥ずかしい想いであった。昭和20年8月15日、戦争に敗れ、焼け跡からの出発を余儀なくされた。復興は奇跡を呼んだ。これは日本人一つで結束した。武士道精神が根底にあったかよ思う。日本人の底力はすごいし、世界は驚いた。よくよく思えば、喜びがあった。悲しみがあった。出会いがあった。そして別離があった。

そして予科練に志願したことは、はたして「ただしかった」ことなのか、今でも考えることがある。自分のことばかり考えて志願したように思う。父母のしあわせを考えてのことではなかった。

人生とはそうしたものだということも言えるかもしれないし、人生は長いようで短い。しかし、特攻隊で出撃した場合、人生は瞬時のうちに終わる。瞬時の人間の生死の点滅が、歴史を形成し、その中で自分も生きている。だが、言いたいことは混沌としているが、命を惜しむことは、自分のことばかりではなく父母をふくんだ大いなる生命の流れを慈しむこと、その中でじぶんもまたあ、生きている、生かされているのだと思った。

宮本武蔵をここで引き合いに出すのは少々おかしいが、わたしと思うことと異なるので書いてみたい。

武蔵は、「神仏にたのみず」と言って剣の道を自己主張しているが、わたしは「神仏の教えを受けたい」と素直に思っている。神や仏はこの世の中に生きているし、日本の社会風土では、「神社」、「仏閣」など厳然と社会のなかで生きている。

この現実と反する生活をしてはならないことである。これに反する生活はあってはならないし、反する行為は神や仏を認めていないということになる。

自分自身を反省し、生きた実践のなかで神仏につながる生活であらねばならないと思

っている。